

オセアニア[NZ]



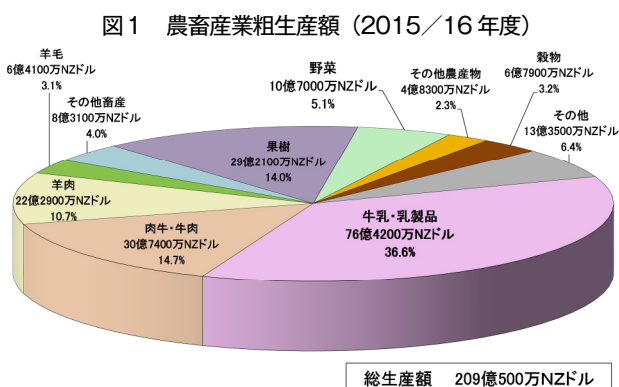
1 農畜産業の概況

ニュージーランド（NZ）は、温暖な気候と豊かな土壌に恵まれ、国土面積（2680 万ヘクタール）のうち、約5割に当たる 1400 万ヘクタールが農地となっている農業立国である。

また、人口が約 470 万人と国内の市場規模が小さいため、農畜産業は貿易に依存した構造となっており、農畜産物の輸出額（FOB）は全体の5割以上を占めており、外貨獲得上、重要な地位にある。

畜産部門は、農畜産業粗生産額、農畜産物輸出額ともに7割以上を占めている。特に牛乳・乳製品は、農畜産業粗生産額、農畜産物輸出額ともに約4割を占めており、基幹部門である。

2015/16 年度（4月～翌3月）の農畜産業粗生産額は、209 億 500 万 NZ ドル（前年度比 5.0 % 減、推計）となった（図1）。

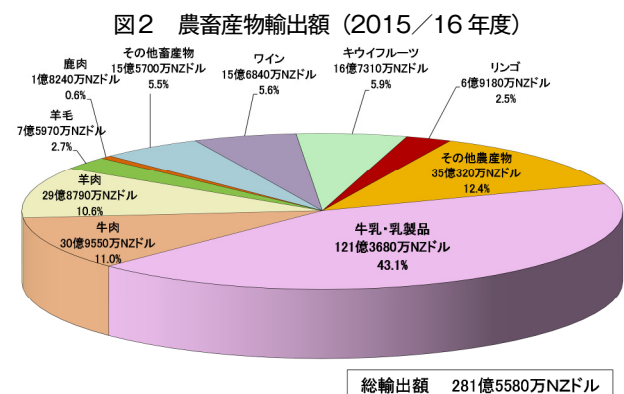


資料：NZ 1 次産業省「Situation and Outlook for Primary Industries」
注：年度は4月～翌3月。

基幹部門である牛乳・乳製品は、前年度から引き続き乳製品国際価格が低迷したことで、2年度連続の大幅減（76 億 4200 万 NZ ドル、同 18.5 % 減）となった。一方、肉牛・牛肉は、堅調な輸出相場や、乳用牛淘汰の進展を受け、30 億 7400 万 NZ ドル（同 17.6 %

増）と大幅に増加した。羊肉は 22 億 2900 万 NZ ドル（同 5.8 % 減）、羊毛は 6 億 4100 万 NZ ドル（同 0.5 % 減）とともに減少した。野菜・果樹・穀物部門は、果樹の好調を受け、51 億 5300 万 NZ ドル（同 6.9 % 増）と好調であったものの、全体としては前年度をやや下回った。

2015/16 年度（7月～翌6月）の農畜産物輸出額（FOB）は、281 億 5580 万 NZ ドル（同 0.5 % 増）とわずかに増加した（図2）。



資料：Beef + Lamb NZ「Compendium of New Zealand Farm Facts」
（原典：Beef + Lamb NZ Economic Service, Statistics New Zealand）
注：年度は7月～翌6月。

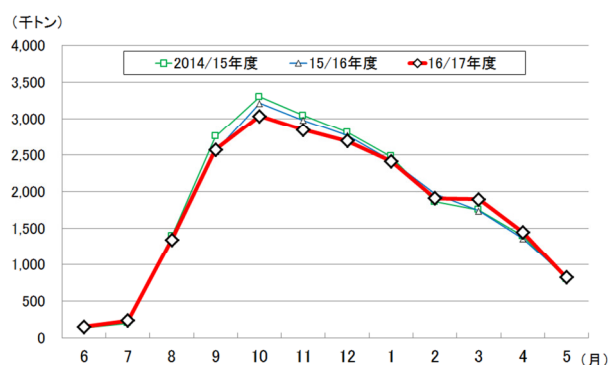
品目別に見ると、牛乳・乳製品は、粗生産額同様、主力製品である全粉乳などの国際価格の下落を背景に、2年度連続の減（121 億 3680 万 NZ ドル、同 7.8 % 減）となった。牛肉は、米国や中国の需要に支えられて、2年度連続の増（30 億 9550 万 NZ ドル、同 3.9 % 増）となった。また、羊肉（ラム・マトン）は 29 億 8790 万 NZ ドル（同 2.3 % 増）、羊毛は 7 億 5970 万 NZ ドル（同 5.6 % 減）となった。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

NZの酪農は、温暖で降水量に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動しており、早春となる8月に搾乳を開始し、10月から初夏となる12月に生乳生産のピークを迎え、その後、次第に減少して、翌年6～7月にはほとんどの搾乳牛が乾乳し分娩に備えるという、明確な季節型の生産体系となっている（図3）。そのため、生乳生産の中心となる9月～翌2月の6カ月間に、年間生産量の約4分の3を生産する。

図3 生乳生産量の推移



資料：Dairy Companies Association of New Zealand

注：年度は6月～翌5月。

NZの生乳生産コストは、放牧中心の飼養形態により、世界的に見ても最も低い水準にある。生産量の95%が輸出に仕向けられる牛乳・乳製品は、NZの総輸出額の約3割を占めており、酪農・乳業部門は、NZの基幹産業の一つとして位置付けられている。

NZは、生乳生産量では全世界の約4%にすぎないが、世界最大の乳製品輸出国である。特に全粉乳の国際市場でのシェアは6割を超える。国内市場の規模が小さいため、生乳生産者価格や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受けやすい構造となっている。

① 主要な政策

酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しない。ニュージーランド・デイリーボード（NZDB）が、2001年9月まで、乳製品の一元的輸出機能を持っていたが、酪農産業の再編が行われ、同年10月、二大酪農協とNZDBの販売機能を取り込んだ巨大酪農協（乳業メーカー）フォンテラが誕生した。

フォンテラの誕生と同時に2001年、生乳および乳製品市場での競争の促進を目的とした酪農産業再編法（Dairy Industry Restructuring Act 2001）が成立した。同法には、フォンテラの寡占による弊害を回避するため、乳業メーカーの新規参入機会の付与が盛り込まれており、フォンテラは、集乳した生乳の一定量を、他社の求めに応じて供給することが義務付けられている。NZにおけるフォンテラの集乳シェアは、依然として8割以上を占めているものの、近年は徐々に低下してきており、この義務付けの見直しに向けた議論が進められている。

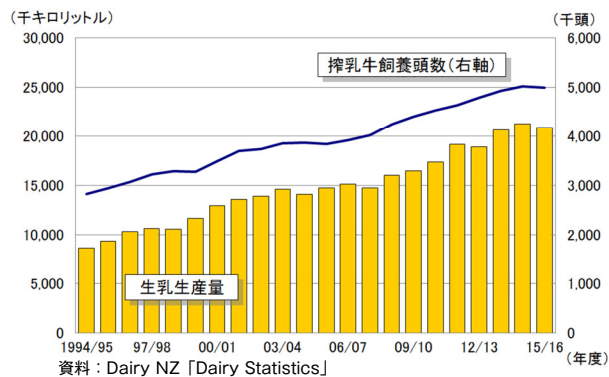
② 生乳の生産動向

搾乳牛の飼養頭数は、酪農産業の再編による競争力の向上や国際的な乳製品需要の増加、さらに、羊・肉用牛部門から収益性に勝る酪農部門への転換などを受け、増加傾向で推移してきた。しかし、前年に乳製品国際価格の低迷に伴い乳用牛の淘汰が進んだことで、2015年は減少に転じた（図4）。

NZの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域を中心に行われてきた。しかし、近年では、乳製品の国際価格の高騰を契機に、南島のカンタベリー地域などでかんがい施設が整備されて酪農が盛んになったことから、特に南島での頭数拡大が著しい。2015年の搾乳牛飼養頭数は、先述の通り、乳用牛の淘汰が進展したことから、499万8000頭（前年比0.4%減）と減少に転じた。このうち、従来からの主産地である北島は298万6000頭（同1.2%減）と減少した一

方で、南島は 201 万 2000 頭（同 0.7 % 増）と増加を続けている（表 1）。

図 4 搾乳牛飼養頭数と生乳生産量の推移



注 1：年度は 6 月～翌 5 月。

2：搾乳牛飼養頭数は 12 月末時点。

1 戸当たり飼養頭数の増加に加えて、補助飼料の給与と増加による 1 頭当たり乳量の増加もあり、生乳生産量は右肩上がりで推移してきた（図 4）。しかし、2015 / 16 年度は、前年度から続く乳製品国際価格の低迷を受け生乳生産者価格が引き下げられたことで、酪農家の生産意欲が減退し、補助飼料の給与が減少したことに加え、少雨による牧草生育の悪化などを受けて、1 頭当たり乳量は 4185 リットル（同 1.2 % 減）、生乳生産量は 2091 万 4000 キロリットル（同 1.6 % 減）とともに前年度をわずかに下回った。

表 1 地域別の飼養戸数・頭数・規模の推移

地域・区分／年度		2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
北島	飼養頭数(千頭)	2.906	2.914	2.955	2.990	3.021
	飼養戸数(戸)	8.947	8.912	8.912	8.859	8.818
	1戸あたり飼養頭数(頭)	325	327	332	338	343
南島	飼養頭数(千頭)	1.623	1.721	1.829	1.933	1.997
	飼養戸数(戸)	2.788	2.886	2.979	3.068	3.152
	1戸あたり飼養頭数(頭)	582	596	614	630	634
合計	飼養頭数(千頭)	4.529	4.634	4.784	4.923	5.018
	飼養戸数(戸)	11.735	11.798	11.891	11.927	11.970
	1戸あたり飼養頭数(頭)	386	393	402	413	419

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注 1：年度は 6 月～翌 5 月。

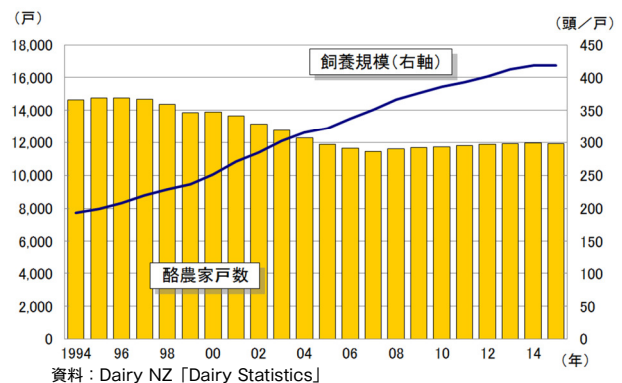
2：各年 12 月末時点。

3：搾乳牛の頭数および戸数。

酪農家戸数は、2007 年に乳製品国際価格が高騰して以降、2014 年（1 万 1970 戸（同 0.4 % 増））にかけて 7 年連続で前年を上回ってきたが、2015 年は、乳価の低迷により、1 万 1918 戸（同 0.4 % 減）と減少に転じた。

1 戸当たり搾乳牛飼養頭数は、規模拡大による増加が続いており、2015 年は 419 頭（前年同）となった（図 5）。なお、1000 頭以上を飼養する経営の全体に占める割合は、5.0 % となっている。

図 5 酪農家戸数と飼養規模の推移



注：各年 12 月末時点。

③ 牛乳乳製品の需給動向

NZでは、最大手の乳業メーカーであるフォンテラが、8割以上の乳製品生産シェアを占める。

輸出相手国は、フォンテラの企業戦略と相まって、中国、東南アジア、中東、北アフリカ、EU、北米など世界140カ国に及んでいる。フォンテラは、2002年に世界的な大手食品メーカー「ネスレ」と合併企業を設立し、2003年1月から、中南米の市場での乳製品製造・販売を手がけている。2007年には、中国に牧場を建設し生乳生産を開始するなど、国際市場への積極的な進出を図っている。

2015/16年度（7月～翌6月）の主な乳製品の輸出量のうち、全粉乳は、主要な輸出先である中国の需要が引き続き低調であったことを受け、135万7000トン（前年度比0.5%減）とわずかに減少した。しかし、脱脂粉乳、バター、チーズは、それぞれ42万8000トン（同3.1%増）、50万5000トン（同6.3%増）、34万トン（同12.2%増）と前年度を上回った。近年は、世界的に乳脂肪分に対する需要が高まっていることなどを受け、バターを中心に、増加幅が大きくなった（表2）。

乳製品国際価格の低迷が続いた中で、乳業メーカー各社は、消費者・外食向けのチーズや、乳幼児や成人向けの高栄養価粉ミルクといった、比較的付加価値の高い乳製品の製造部門を強化するなど、プロダクト・ミックス（製品製造比率）の調整により対応した。

表2 生乳生産量および乳製品輸出量の推移

（単位：千頭、千キロリットル、千トン）

区分／年度		2011/12	12/13	13/14	14/15	15/16
経産牛飼養頭数		4,634	4,784	4,923	5,018	4,998
生乳生産量		19,129	18,883	20,657	21,253	20,914
輸出量	バター	442	462	495	475	505
	チーズ	275	310	266	303	340
	全粉乳	1,126	1,281	1,407	1,364	1,357
	脱脂粉乳	349	413	360	415	428

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」、Statistics New Zealand

注1：搾乳牛飼養頭数は12月末時点、単位は千頭。

2：生乳生産量は6月～翌5月、単位は千キロリットル。

3：乳製品輸出量は7月～翌6月、単位は千トン。

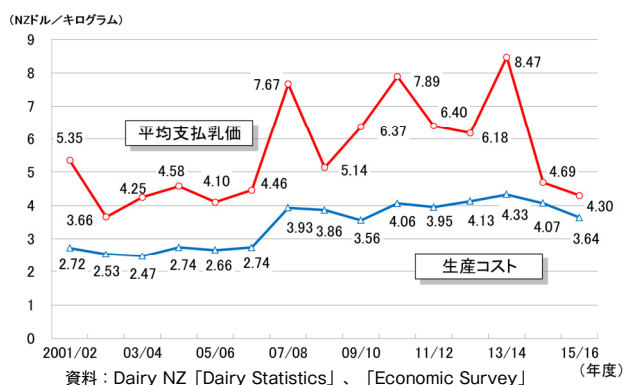
④ 乳価の動向

生乳生産者価格（平均支払乳価）は、乳製品の国際相場や為替相場（NZドル）の動向などに左右される。

2015/16年度（6月～翌5月）の平均支払乳価は、世界的な乳製品生産の増加や、主要な乳製品輸入国である中国などの需要の減速を背景に、前年度から乳製品国際価格の低迷が続いたことを受け、乳固形分1キログラム当たり4.3NZドル（前年度比8.3%安）と、大幅に下落した前年度に続き下落した（図6）。

生産コストは、2000年代後半に入ってから、乳価の上昇を受け、放牧中心の低コスト生産が特徴のNZ酪農においても、補助飼料として、濃厚飼料の給与が増加したことで、微増傾向で推移してきた。しかし、2015/16年度は、乳価の低迷が続いて酪農家の生産意欲が減退し、補助飼料の給与やかんがい施設への投資などが抑制された結果、同3.64NZドル（同10.6%減）と2年度連続での減少となった。

図6 生産コストと平均支払乳価の推移（乳固形分ベース）

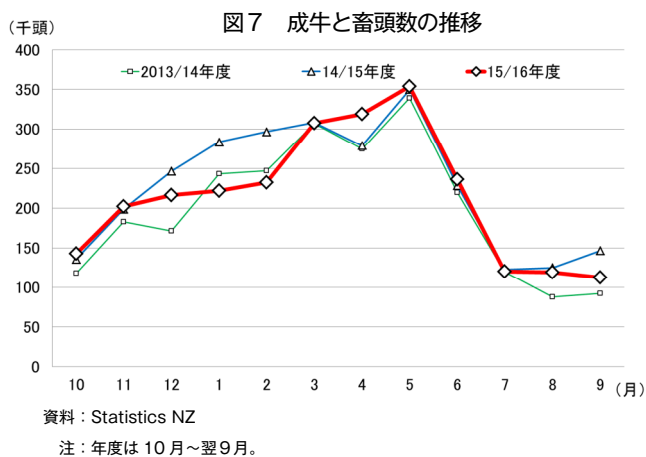


(2) 肉牛・牛肉産業

NZの肉用牛生産は、草地に依存した生産体系となっており、フィードロットでの穀物肥育による生産は、ごくわずかである。

牛肉生産が酪農の動向と密接に連動していることは、NZの肉牛・牛肉産業の特徴の一つである。

年間の成牛と畜頭数の推移を見ると、生乳生産が終了する5月にピークを迎える。これは、乾乳期に入るのに合わせて、乳用牛の淘汰が増加するためである。その後、冬に向けて大きく減少し、8月～9月は、ピーク時の3分の1程度となる（図7）。



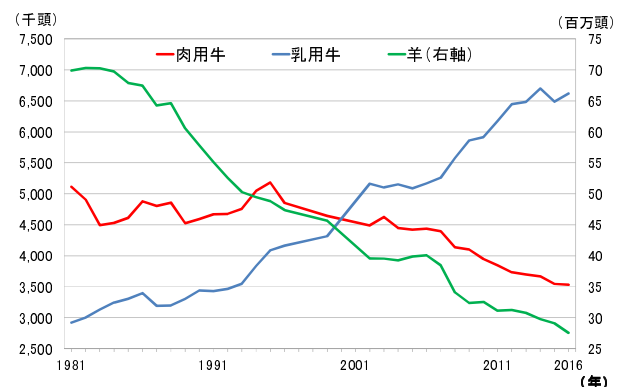
また、肉用牛として飼養される牛の約3割は、乳用種または交雑種（乳用種×肉用種）となっている。酪農部門から供給される乳用種のうち、経産牛のほとんどは肥育されずに加工用牛肉（挽き材用）として、NZ最大の輸出市場である米国を中心に輸出されている。雄牛は、肥育されるものはごくわずか、大半が生後4日程度でと畜され、子牛肉用として出荷されている。

NZの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから、酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉のうち、枝肉重量ベースで9割程度が輸出に仕向けられている。このため、肉牛・牛肉産業も、国際市場の影響を強く受けている。

① 牛の飼養動向

肉用牛の飼養頭数の推移を長期的に見ると、収益性の悪化による経営規模の縮小や、酪農や林業などの、より収益性の高い部門への転換などにより、1995年の518万頭をピークに右肩下がりとなっており、2000年には右肩上がりが増加している乳用牛と逆転した。特に2007年以降は、乳製品国際価格の高騰から、肉用牛・羊から酪農への転換が一層進んでおり、乳用牛の増加と、肉用牛の減少の傾向が強まっている（図8）。

図8 主要家畜の飼養頭数の推移



2016年6月末時点の肉用牛飼養頭数は、長期的な減少傾向に加え、輸出需要の高まりを受けて肉用牛のと畜が増加した影響から、353万3000頭（前年比0.4%減）と7年連続の減少となった（表3）。

表3 牛飼養頭数の推移

（単位：千頭）

区分／年	2011	2012	2013	2014	2015	2016
肉用牛	3,846	3,734	3,699	3,670	3,547	3,533
うち繁殖雌牛	1,053	1,060	1,019	1,012	982	954

資料：Statistics NZ
注：各年6月末時点。

② 牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、2000年代前半まではおおむね増加傾向にあったが、その後は飼養頭数の減少とともに減少が続いており、2010/11年度から2013/14年度は、60万トンを超える水準で推移した。

2014/15年度は、北島の干ばつや米国向け輸出需要の高まりから、乳用牛淘汰が進展したことなどを受け、と畜頭数、牛肉生産量はともに増加した。しかし、2015/16年度は、米国向け需要や乳用牛の淘汰が一段落したこと、成牛と畜頭数は258万5000頭（前年度比5.0%減）、牛肉生産量は63万3000トン（同4.2%減）とともに減少したが、引き続き高水準を保っている（表4）。

イ 輸出動向

2015/16年度の牛肉輸出量は、42万4000トン（同1.9%減）となった（表4）。ここ数年、高水準で推移しているものの、生産量と同様、減少に転じた。

輸出地域別に見ると、最大の輸出先である米国を含む北米市場向けは22万4300トン（同9.9%減）と、大幅に増加した前年度の反動から、かなりの程度減少した。北米市場向けは、加工用牛肉が主体であり、輸出量は乳用経産牛のと畜頭数の動向に左右される。

米国は牛群再構築が完了し、国内生産が増加局面にあったことも、輸出量が減少する要因となった。また、北米に次ぐ輸出先である北アジア市場向けは、これまで見られた急激な増加傾向は鈍化しているものの、中国を中心に14万2000トン（同15.5%増）と増加を続けている。

表4 牛肉需給の推移

（単位：千頭、千トン）

区分／年度	2011/12	12/13	13/14	14/15	15/16
成牛と畜頭数	2,192	2,374	2,403	2,722	2,585
子牛と畜頭数	1,694	1,935	2,129	2,120	1,925
牛肉生産量	575	598	599	661	633
子牛肉生産量	28	31	34	34	30
牛肉輸出量	351	367	391	432	424

資料：Statistics NZ、Beef + lamb NZ「Annual Report」

注1：年度は10月～翌9月。

2：と畜頭数の単位は千頭。

3：生産量および輸出量の単位は千トン。

4：生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース（子牛肉含む）。

③ 肉用牛価格の動向

NZでは、生産された牛肉のうち9割程度（枝肉重量ベース）が輸出に仕向けられることから、同国の肉用牛価格は、輸出先の経済状況や、主要決済通貨である米ドルや英国ポンド、ユーロに対するNZドルの為替相場、そして最大の輸出市場である米国国内における牛肉の生産や価格の動向に左右される傾向がある。

輸出用肉用牛の生産者手取価格は、米国や中国からの堅調な需要により、2010/11年度以降、比較的高い水準を維持しており、2015/16年度は、1頭当たり1181NZドル（前年度比3.2%高）と、大幅に上昇した前年度に続いての上昇となった（表5）。

表5 輸出用肉用牛の1頭当たり手取価格の推移

（単位：NZドル／頭）

区分／年度	2011/12	12/13	13/14	14/15	15/16
生産者手取価格	1,016	933	909	1,144	1,181

資料：Beef + lamb NZ「Farm Facts」

注1：年度は10月～翌9月。

2：皮革を含む。